
研究

「ネットを介した出会い」経験者と非経験者の ネット利用の差異

—中学校Aの調査結果に基づいて—

Differences of the Internet Use Between Experienced Students and Non-Experienced Students about Online Dating: On a Survey in A Junior High School

キーワード：

中学校, 携帯電話, スマートフォン, フィルタリング, 出会い

keyword：

Junior High School, Mobile Phone, Smart Phone, Filtering Service, Online Dating

金沢大学大学院人間社会環境研究科 加藤 千枝

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies Kanazawa University

Chie KATO

要 約

本研究では「ネットを介した出会い」経験者と非経験者のネット利用の差異を検討することを目的として、公立中学校Aの生徒を対象に質問紙調査を実施した。なお、ここでは「ネットを介した出会い（以下、括弧をはずす）」をオフライン上で交流のない者とネットを介して知り合い、実際に会うこととする。質問紙調査の結果、ネットを介した出会い経験者は1日のネット利用時間が非経験者よりも有意に長かった。また、出会い経験者が積極的に利用しているサイトとして「ソーシャルネットワーキングサイト（サービス）」が挙げられ、非経験者が利用しているサイトとして「動画」が挙げられた。一方、たとえばフィルタリング導入の有無や学校生活全般への充実度について、出会い経験者と非経験者の間に有意差はなく、また、先行研究では男子より女子の方がネットを介した出会いを実現させていたが、本研究において有意差はなかった。

Abstract

In this study, questionnaire survey was carried out for the A junior high school students to clarify differences of the Internet use between experienced students and non-experienced students about online dating. We defined online dating as getting to know others that students had never met in the offline world. As the result, we clarified two points by analyses. First, experienced students had long time to use the Internet per a day compared with non-experienced students. The reason was that experienced students accessed social networking sites to communicate with others and to update their own weblogs frequently. Second, experienced students realized online dating regardless of grade, sex, the use of filtering services, sending and receiving messages per a day and the sense of fulfillment toward school life.

(受付：2013年6月11日，採択：2015年2月27日)

1 本研究の目的と研究背景

スマートフォンをはじめとしたネット端末の広まりにより、青少年の「ネットを介した出会い」に関するトラブルが社会的に問題視されるようになった現状を踏まえ、本研究では筆者が定期的に講習会活動を行っている公立中学校Aの生徒を対象にネット利用に関する質問紙調査を実施する。具体的には中学校Aの調査結果から、「ネットを介した出会い」経験者と非経験者の差異を明らかにする。なお、本研究で言及する「ネットを介した出会い（以下、括弧をはずす）」とは、オフライン上で交流のない者とネットを介して知り合い、実際に会うことを意味する。それゆえ、異性との出会いだけでなく同性との出会いも含まれ、また、1対1で実現される出会いだけでなく、1対n、n対nで実現される出会いも対象とする。

1.1 青少年のネット利用とネットを介した出会いの広まり

近年、多くの青少年が携帯電話やスマートフォン等の自分専用のネット端末を所持し、ネットを利用していることは複数の先行研究より明らかとなっている（内閣府、2014等）。青少年は自分専用のネット端末を所持することで情報を受信するだけでなく、自ら情報を発信していることも考えられる。また、情報を受発信する中で、同窓生だけでなく他校や他県の見知らぬ者と知り合う可能性もある。その結果、ネットを介した出会いを実現させることも考えられる。出会いを実現させたことで、充実した学校生活を送ることができる者がいる一方で、サイバーストーカーやストーカーを含む性的被害に遭う者もいる（加藤、2013）。それゆえ、出会いの実現は青少年にとって、理想的なものになるとは必ずしも言えない。しかしながら、伊藤（2011）が群馬県の高校生1,794名に対して行った質問紙調査によると、「ネット上で知り合った人と実際に会ったことがあるか」との

問いに対して、女子の18.3%、男子の9.3%が「ある」と回答していた。上記より、出会いの実現はリスクを伴うものであるがそれにも関わらず、一部の青少年は出会いを実現させており、また、男子よりも女子の方が出会いに対して積極的であると考えられる。

1.2 ネットを介した出会いが実現される背景

先行研究より、一部の青少年がネットを介した出会いを実現させていると言えるが、どのような理由から彼・彼女らは出会いを実現させるのであろうか。

第一に、青少年は新たな人間関係を形成するために、ネットを介した出会いを実現させていることが考えられる。特に青年期は異性に対する興味関心が高まり（Newmanら、1988）、また、異性に限らず、互いの価値観を語り合える「ピア・グループ」の形成時期にあることから（保坂、2010）、理想的な異性や同性との関係形成を求めて、出会いを実現させる者がいると思われる。特にオフライン上で充実した他者との関係を構築することが難しい者ほど、それを補うためにネット上に他者との理想的な関係を求めることが予想される。

第二に、仮にネットを介した出会いを実現させる意志が無かったとしても、出会いを実現させてしまう青少年がいることも考えられる。その理由として、他者とのネットを介したやりとりにより「自己開示」が促され、その結果として両者の親密性が高まることが予想されるからである（木内ら、2008等）。また、ネット上のやりとりは文字コミュニケーションが主であることから非対面でのやりとりが中心であると言え、そのことにより、対面よりも「自己呈示」し易くなることが考えられる。具体的には、ネット上であれば他者から良い印象を得るため、あるいは社会的承認や報酬を得るために、特定の情報を強調したり、自己に関する情報を選択して伝達することが容易にな

る(古川, 2008)。ネット上の「自己呈示」により相手を理想化した結果, 出会いを実現させる者もいると考えられる。

1.3 ネットを介した出会いの実現に伴うリスク

ネットを介した出会いの実現は青少年にメリットだけでなく, デメリットももたらすことは先に言及した通りである。たとえば加藤(2013)の研究では, 出会い経験のある青少年女子8名に対して半構造化面接を行い, その結果, 一部の女子はストーカーやサイバーストーカー被害, セクシャルハラスメント, 個人情報を詐称されるといった経験をしていることが示されていた。またマスコミで取り上げられた事件として, たとえば2007年にモバゲータウンで発生した, 高校生女子(16歳)が成人男性(30歳)とサイトを介して知り合い, 直接会った結果, 相手に殺害された事件が挙げられる。上記より, 出会いを実現させるということは, 相応のリスクを伴う行為であると言えよう。

1.4 ネットを介した出会いの実現とフィルタリング導入の有無

これまで言及してきたようなネットを介した出会いの実現に伴うリスクを防ぐための一つの有効な手段として, たとえばフィルタリングの導入が挙げられる。具体的にはネット端末にフィルタリングを導入することにより, 青少年が見知らぬ者と知り合う可能性の高いサイト(ソーシャルネットワーキングサイトやインスタントメッセージ等)の利用が一部制限される。それゆえ, それらのサイトを介して見知らぬ者と知り合う機会自体が減少し, 結果として出会いを実現させる者も少なくなることが予想される。実際, 警察庁(2012)の「コミュニティサイトに起因する児童被害の事犯に係る調査結果」によると, ソーシャルネットワーキングサイト(以下, SNSとする)等のコミュニティサイトを介して見知らぬ他

者と知り合い, 出会いを実現させた青少年の9割以上がネット端末にフィルタリングを導入していなかった。以上のことから, 出会い経験者は非経験者と比較して, フィルタリングを導入していない者が複数いることが予想される。しかしながら, たとえネット端末にフィルタリングを導入していたとしても, 出会いの実現に繋がる一部のサイトへのアクセスは可能なので, フィルタリング導入の有無が出会い経験の有無と関連しているとは言いきれない。

1.5 本研究の目的

先行研究を踏まえ本研究では, 筆者が講習会活動を行っている中学校Aの生徒を対象にネット利用に関する質問紙調査を実施し, ネットを介した出会い経験者と非経験者の差異を量的に検討することを目的としたい。

得られる結果として第一に, 男子よりも女子がネットを介した出会いを実現させていることが考えられる。しかしながら, 本研究では中学生を対象とした調査であるため, 伊藤(2011)が高校生を対象として行った調査と同様に男女差が見られるかは明らかでない。

第二に, 警察庁(2012)の調査より, ネットを介した出会い経験者は非経験者よりもネット端末にフィルタリングを導入していない者が複数いることが予想される。しかしながら, ネット端末にフィルタリングを導入していた場合でも, 出会いに繋がる一部のサイトへのアクセスは可能なので, フィルタリングを導入している者が出会い非経験者であるとは限らない。また, トラブルや事件に巻き込まれた後に, フィルタリングを導入したということも考えられる。

第三に, ネットを介した出会い経験者は, 非経験者よりも学校生活全般への充実度が低いと考えられる。その理由として, オフライン上で充実した他者との関係を形成できており, 勉強や部活動等に積極的な者はネット上に新たな出会いを求め

たり、そのために多くの時間を費やしたりする必要がないと予想されるからである。一方、充実した学校生活を送ることができていない者は、それを補うためにネット上で多くの時間を費やすと考えられる。しかし、前者のような外向的で社会的サポートの多い者の方が、ネットを利用するほど孤独感が減少し、社会的参加が増えることから(Krautら, 2002等), 出会いを実現させるメリットを享受できるとも思われる。

最後に、ネットを介した出会い経験者と非経験者で利用しているサイトに差異があることも予想される。出会い経験者はそれを実現させるために、特定のサイトを利用していることが考えられる。また、そのサイト上で複数の他者とやりとりしていることも予想され、1日のネット利用時間が非経験者よりも有意に長くなると思われる。中学校Aという限定された範囲における調査ではあるが、本研究で上記4点を明らかにしたい。

加えて、本研究においてネットを介した出会い経験者と非経験者のネット利用の差異を明らかにすることで、中学校Aの保護者や教師のネットモラル・リスクに関する知識の向上に貢献できると考える。中学生は高校生以上の青少年と比較して自分専用の携帯電話やスマートフォンを所持している者が少ない。そのため、一部の保護者や教師は出会いを実現させる(機会を有する)中学生は少数だと考えているであろう。しかし、たとえ自分専用の携帯電話やスマートフォンを所持していなかったとしても、iPodなどの音楽プレーヤーやPSPなどの小型ゲーム機からネット接続は可能なので、知識のある中学生はそれらのネット端末から出会いを実現させることが考えられる。また、出会いに対して興味・関心がなかったとしても、音楽プレーヤーや小型ゲーム機を利用している中で偶然ネットに接続されてしまい、オフライン上でこれまで関わりのなかった者と知り合い、出会いを実現させる者もいると思われる。そのため本研究において、中学生のネットを介した出会いの

実態についてその一部を明らかにすることで、保護者や教師の中学生のネット利用に対する意識が高められると考える。

2 方法

2.1 調査対象者

関東地方の中学校Aに在籍する1～3年生415名の生徒を対象に、質問紙調査を実施した。なお、中学校Aは郊外にあり、近隣には大規模商業施設と駅がある。

2.2 質問紙の内容

本調査における質問項目は、群馬大学社会情報学研究センター(2010)で実施された質問紙調査の項目を参考にして作成されたものである(注1)。

2.3 手続き

調査用紙の冒頭に個人情報保護及び研究参加の任意性を紙面上で説明し、生徒から調査実施の同意を得た上で実施した。調査は学校長の了解のもと、2013年1月中旬、ホームルームの時間に10分程度で実施された。また、質問用紙、回答用紙の回収は各クラスの担任にお願いした。

2.4 分析方法

生徒にはマークシートでの回答を依頼し、得られた回答はExcelを用いて集計した。また有意差を検討するため、ピアソンの χ^2 乗検定とウィルコクソンの順位和検定を用いた(以下、全ての検定における有意水準 $\alpha = 5\%$ とする)。

3 結果

中学校Aの生徒415名を対象に質問紙調査を実施したところ、403名から有効回答を得ることができた(有効回答率97.1%)。403名のうちネッ

トを介した出会いを実現させた経験のある者は61名(15.1%)であった。以下、342名を“ネットを介した出会い非経験者(出会いなし)”, 61名を“出会い経験者(出会いあり)”として結果を整理する。

3.1 ネットを介した出会い経験の有無と性別

表-1はネットを介した出会い経験の有無と性別のクロス集計表である。男女共に「出会いなし」と回答した者が8割以上であった。 χ^2 検定の結果、有意差はなかった($\chi^2=2.62$, ns)。

表-1 男女の人数(%)有効回答403

	男	女	計
出会いなし	173 (87.8)	169 (82.0)	342
出会いあり	24 (12.2)	37 (18.0)	61
計	197 (100)	206 (100)	403

3.2 ネットを介した出会い経験の有無と学年別

表-2はネットを介した出会い経験の有無と学年のクロス集計表である。各学年共に「出会いなし」と回答した者が8割以上であった。 χ^2 検定の結果、有意差はなかった($\chi^2=0.18$, ns)。

表-2 学年の人数(%)有効回答403

	1年	2年	3年	3年
出会いなし	114 (83.8)	113 (85.6)	115 (85.2)	342
出会いあり	22 (16.2)	19 (14.4)	20 (14.8)	61
計	136 (100)	132 (100)	135 (100)	403

3.3 ネットを介した出会い経験の有無と利用しているネット端末

図-1・2は現在利用しているネット端末を複数回答で求め、集計したものである。結果、ネットを介した出会い非経験者は「家族のPC」「自分の携帯」「自分のスマホ」の順でネットを利用していることがわかり、出会い経験者についても同様の傾向が見られた(注2)。

図-1 「出会いなし」の者が利用しているネット端末 有効回答523

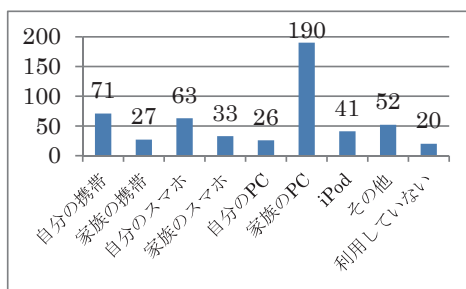
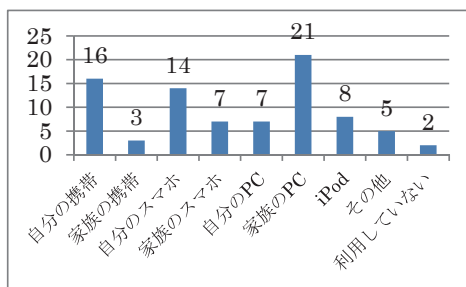


図-2 「出会いあり」の者が利用しているネット端末 有効回答83



3.4 ネットを介した出会い経験の有無とフィルタリング導入の有無

表-3はネットを介した出会い経験の有無と(現在最も利用しているネット端末への)フィルタリング導入の有無のクロス集計表である。出会い経験の有無に関わらず、フィルタリングが導入されているか「わからない」と回答した者が多数いた。 χ^2 検定の結果、有意差はなかった($\chi^2=3.94$, ns)。

表-3 フィルタリング導入(%)有効回答381

	導入 されて いる	導入 されて いない	わから ない	計
出会い	96	41	185	322
なし	(84.2)	(75.9)	(86.9)	
出会い	18	13	28	59
あり	(15.8)	(24.1)	(13.1)	
計	114 (100)	54 (100)	213 (100)	381

3.5 ネットを介した出会い経験の有無と1日のネット利用時間

表-4はネットを介した出会い経験の有無と1日のネット利用時間のクロス集計表である。「出会いなし」の者は「1時間未満」と回答した者が最も多かったが、「出会いあり」の者は「3時間以上」と回答した者が最も多かった。ウィルコクソンの順位和検定の結果、有意差はあった($Z=2.31$, $.01 < p < .05$)^(注3)。

表-4 1日のネット利用時間(%)有効回答381

	1H 未満	1~2H 未満	2~3H 未満	3H 以上	計
出会い	191	72	26	33	322
なし	(91.4)	(85.7)	(74.3)	(62.3)	
出会い	18	12	9	20	59
あり	(8.6)	(14.3)	(25.7)	(37.7)	
計	209 (100)	84 (100)	35 (100)	53 (100)	381

3.6 ネットを介した出会い経験の有無と1日のメール送受信数

表-5はネットを介した出会い経験の有無と1日のメール送受信数のクロス集計表である。全体的な傾向として、1日のメール送受信数は「10通未満」と回答した者が多かった。しかし、「出会いあり」の者は「50通以上」と回答した者も多かった。ウィルコクソンの順位和検定の結果、有意差はなかった($Z=1.89$, ns)。

表-5 1日のメール送受信数(%)

	10通 未満	10~29 通	30~49 通	50通 以上	計
出会い	190	75	28	29	322
なし	(86.8)	(88.2)	(80.0)	(69.0)	
出会い	29	10	7	13	59
あり	(13.2)	(11.8)	(20.0)	(31.0)	
計	219 (100)	85 (100)	35 (100)	42 (100)	381

3.7 ネットを介した出会い経験の有無と現在利用しているサイト

3.7.1 利用しているサイトを複数回答で求めた結果

図-3・4は現在利用しているサイトを複数回答で求め、集計したものである。その結果、出会い非経験者が積極的に利用しているサイトとして、「動画(サイト)」「SNS」「掲示板」の順で挙げられた。一方、出会い経験者が積極的に利用しているサイトとして、「SNS」「動画」「掲示板/インスタントメッセージ(以下、IMとする)」の順で挙げられた。

なお、本研究では「動画」の具体例として「YouTube」「ニコニコ動画」の2サイトを挙げ、回答を求めた。また、「SNS」の具体例として「モバゲー」「GREE」「アメーバ」「mixi」「facebook」の5サイトを挙げ、「IM」の具体例として「LINE」「comm」の2サイトを挙げ、回答を求めた。

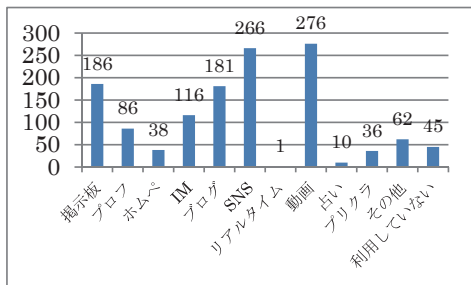


図-3 出会い非経験者が利用しているサイト有効回答1303

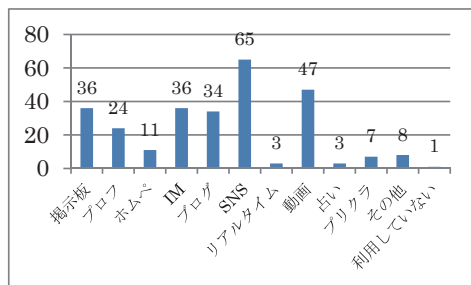


図-4 出会い経験者が利用しているサイト有効回答275

3.7.2 最も利用しているサイトを単数回答で求めた結果

表-6はネットを介した出会い経験の有無と現在最も利用しているサイトのクロス集計表である。全体的な傾向として「動画」の利用が多かったが、「出会いあり」の者は「SNS」の利用が最も多かった。 χ^2 検定の結果、有意差はあった($\chi^2=16.0$, $p<.01$)。そこで残差分析を行った結果、表-7に見られるように、「SNS」の利用は出会い経験者が多く、「動画」の利用は非経験者が多かった。

なお「その他」には、利用者の少なかった「掲示板」「プロフ」「ホーム」「ブログ」「リアルタイム」「占い」「プリクラ」が含まれている。

表-6 現在最も利用しているサイト(%)有効回答335

	SNS	IM	動画	その他	計
出会いなし	56 (70.0)	46 (78.0)	125 (88.7)	50 (90.9)	277
出会いあり	24 (30.0)	13 (22.0)	16 (11.3)	5 (9.10)	58
計	80 (100)	59 (100)	141 (100)	55 (100)	335

表-7 調整された残差 (** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$, ns有意差なし)

	SNS	IM	動画	その他
出会いなし	-3.44**	-1.06ns	2.46*	1.76†
出会いあり	3.44**	1.06ns	-2.46*	-1.76†

3.8 ネットを介した出会い経験の有無と学校生活全般への充実度

本研究では学校生活全般の状況を把握するために、群馬大学社会情報学研究センター(2010)

で行われた質問紙調査の項目を参考にして、学業への意欲と親友^(注4)の有無、学校に対する満足の3点(以下、学校生活全般への充実度とする)について尋ねた。

3.8.1 ネットを介した出会い経験の有無と学業への意欲

表-8はネットを介した出会い経験の有無と学業への意欲のクロス集計表である。全体的な傾向として、「(勉強が)好きでない」と回答した者が多数であった。 χ^2 検定の結果、有意差はなかった($\chi^2=3.62$, ns)。

表-8 学業への意欲(%)有効回答403

	どちら			計
	好き	でも ない	好きで ない	
出会い なし	48 (82.8)	115 (89.8)	179 (82.5)	342
出会い あり	10 (17.2)	13 (10.2)	38 (17.5)	61
計	58 (100)	128 (100)	217 (100)	403

3.8.2 ネットを介した出会い経験の有無と親友の有無

表-9はネットを介した出会い経験の有無と親友の有無のクロス集計表である。全体的な傾向として、「(親友が)いる」と回答した者が多数であった。 χ^2 検定の結果、有意差はなかった($\chi^2=4.13$, ns)。

表-9 親友の有無(%)有効回答403

	どちら			計
	いる	でも ない	いない	
出会い なし	274 (85.9)	44 (86.3)	24 (72.7)	342
出会い あり	45 (14.1)	7 (13.7)	9 (27.3)	61
計	319 (100)	51 (100)	33 (100)	403

3.8.3 ネットを介した出会い経験の有無と学校に対する満足

表-10はネットを介した出会い経験の有無と学校に対する満足のクロス集計表である。全体的な傾向として、「(学校が)楽しい」と回答した者が多数であった。 χ^2 検定の結果、有意差はなかった($\chi^2=0.06$, ns)。

表-10 学校に対する満足(%)有効回答403

	どちら			計
	楽しい	でも ない	楽しく ない	
出会い なし	252 (85.1)	58 (84.1)	32 (84.2)	342
出会い あり	44 (14.9)	11 (15.9)	6 (15.8)	61
計	296 (100)	69 (100)	38 (100)	403

4 考察

ネットを介した出会い経験者と非経験者のネット利用に関する量的調査結果に基づき、以下に考察を行う。本研究は中学校Aという限られた範囲における調査であったため、その結果から中学生全体のネット利用の実態について言及することは難しい。しかしながら冒頭で述べた通り、本研究の結果を考察することに一定の意義はありと考

る。それゆえ、上記の点に留意しながら考察する。

4.1 ネットを介した出会い経験のある中学生の割合

先に言及したように、中学校Aは著者が講習会活動をしている学校であるため、生徒は一般の中学生よりもネットリテラシーの高い者が多いことが予想される。それにも関わらず、ネットを介して知り合った者と実際に会った経験を有する者が、一定数存在した(15.5%)。上記より、ネットモラル・リスク教育を継続的に受けていない中学生は中学校Aの生徒よりも高い割合でネットを介した出会いを実現させていることが考えられる。逆に、出会いのリスクが講習会の中で中学校Aの生徒に十分に伝わっていないという可能性も考えられ、いずれにしても本研究の調査をベースとして、他校での量的調査の実施とその内容の検討を行っていく必要がある。

4.2 出会い経験者と非経験者のネット利用の差異

本研究の結果より、ネットを介した出会い経験者と非経験者の差異として、1日のネット利用時間が挙げられた。つまり、出会い経験者は非経験者よりも積極的にネットを利用していることが考えられる。ネットを積極的に利用している結果として出会いが実現されたのか、出会いを実現させる過程においてネットを積極的に利用する必要があったのかを明らかにすることは出来なかったが、それについて考察するための手がかりを得ることができた。

具体的には、利用しているサイトについて生徒に複数・単数回答を求めた結果、ネットを介した出会い経験者が最も利用しているサイトとして「SNS」が挙げられた。「SNS」は自身のプロフィールページを作成し、そこを中心に他者と交流するサイトである。また、やりとりする他者についても、「SNS」では既存の友人・知人だけでなく、

共通の趣味や関心を持つ者と容易に知り合うことができるため、一部の生徒は「SNS」を利用することで1日のネット利用時間が増加し、また、出会いが実現されたと考えられる。

4.3 出会い経験者と非経験者のネット利用で差異がなかった項目

本研究の結果より、ネットを介した出会い経験者と非経験者で有意差がなかった項目として、性、学年、フィルタリング導入の有無、1日のメール送受信数と学校生活全般への充実度を計るための3項目が挙げられた。

4.3.1 出会い経験の有無と性・学年

伊藤(2011)の研究では女子が男子よりもネットを介した出会いを実現させていることが示されていたし、警察庁(2014)の出会い系サイト及びコミュニティサイトの被害児童に関する調査でも、出会いを実現させた結果、被害者となったのは女子(女性)の割合が高かった。しかしながら、本研究では出会い経験の有無について性差はなかった。その理由として第一に、中学校Aという限定された範囲における調査であることが影響していると思われる。第二に、女子の場合、マスコミ等の情報から、出会いの実現により性的犯罪に巻き込まれることを警戒しているためとも考えられる。また、警察庁(2014)の調査は出会いを実現させ、かつ、(主に性的)被害に遭った者を対象とした調査であるため、男女差が見られたと思われる。しかし実際には、被害には遭っていないが出会いを積極的に実現させている男子が複数いることも考えられ、更なる調査・研究が求められる。

また、本研究では学年によってネットを介した出会い経験の有無に差異があるという結果は得られなかった。学年が上がるごとにネット端末と接する機会が増えるため(授業の中で利用したり、友人・知人、兄弟姉妹がネット端末を所持し始め

たり等), 出会い経験を有する者も増えると考えたが, 予想とは異なる結果であった。その理由として, 低学年への出会い文化の広まりと中・高学年への講習会内容の浸透が考えられる。ネット上で知り合った者と直接会うことに対する抵抗がネット端末の広まりにより薄れつつある一方, 中学校Aの場合, 中・高学年に対してはこれまで少なくとも2回以上出会いを実現させることに対するリスクについて筆者が講習会で話をしているので, 両方の理由から本研究の結果が得られたと思われる。

4.3.2 出会い経験の有無とフィルタリングの導入

先行研究ではネットを介した出会いを実現させ, その結果, 被害に遭った青少年はフィルタリングを導入していない者がほとんどであったと指摘されていたが(警察庁, 2012), 本研究では出会い経験者と非経験者でフィルタリング導入の有無に有意差はなかった。その理由として, 以下3点が考えられる。

第一に, フィルタリングが中学校Aの生徒に十分に浸透していないという視点である。それゆえ, ネットを介した出会い経験の有無に関わらず, 本研究ではフィルタリング導入の有無について有意差がなかったと思われる。

第二に, フィルタリングを導入している場合でも一部の出会いに繋がる可能性のあるサイトへのアクセスはできるので, ネットを介した出会いが実現されるというものである。この点については加藤(2013)の青少年女子を対象とした半構造化面接結果からも明らかとなっており, フィルタリングを導入していた場合でも, 出会いが実現され, 結果として青少年女子が性的被害に遭うという事例が報告されていた。上記より, フィルタリングはネット利用に伴う様々なリスクを防ぐため有用な手段であるが, それにより危険人物や犯罪者との出会いを防いだり, トラブル・事件に巻き込まれる可能性を完全に無くしたりすることは難し

いと言える。

第三に, 先にも言及した通り, 警察庁(2012)の調査ではネットを介した出会いを実現させ, かつ, トラブル・事件に巻き込まれた青少年に限定してフィルタリング導入の有無について言及していたため, 出会い経験者の中でも特殊な経験を有する者を対象として行われた調査であったと考えられる。本研究の出会い経験者の中にもトラブル・事件に巻き込まれた経験を有する者はいるであろうが, 仮に出会いを実現させたとしてもトラブル・事件に必ず巻き込まれるとは断言できない。上記のような調査対象者の差異から, 本研究ではフィルタリング導入の有無について出会い経験者と非経験者で有意差はなかったと考えられる。しかしながら一般的に, トラブル・事件に巻き込まれる可能性は, フィルタリングを導入していない者の方が導入している者よりも高いため, 中学校Aの生徒にそのリスクを如何に伝えるかが, 今後の講習会における課題になると言えよう。

4.3.3 出会い経験の有無と1日のメール送受信数

1日のメール送受信数について, ネットを介した出会い経験者の方が非経験者よりも多いと推測していたが, 本研究において有意差はなかった。その理由として, 「mixi」や「facebook」等の「SNS」, 「LINE」や「comm」等のIMの広まりが考えられる。特に出会い経験者は非経験者よりも「SNS」の利用が積極的なことから, メールアドレスを用いたメッセージのやりとりではなく, そのチャット機能や掲示板機能等を用いて相手とやりとりしているため, 本研究では1日のメール送受信数について有意差がなかったと考えられる。

4.3.4 出会い経験の有無と学校生活全般への充実度

最後に, 学校生活全般への充実度を計るための項目として, 本研究では学業への意欲, 親友の有無, 学校に対する満足の3点について生徒に尋ね

た。ネットを介した出会い経験者は非経験者と比較して、たとえば勉強をすることや友人との付き合い、学校に毎日通うこと等を含む、学校生活全般への充実度が低いと推測したが、本研究では推測に沿った結果を得ることが出来なかった。つまり、出会い経験者は学校生活全般への充実度が非経験者と比べて極端に低いわけではないと考えられる。しかしながら、親友の有無について有意差はなかったものの、親友が「いない」と回答した者の割合が若干高かったため、更なる調査を行い、その実態を明らかにしたい。

5 結論

本研究において、ネットを介した出会い経験者と非経験者の間で有意差があった項目として、1日のネット利用時間と現在最も利用しているサイトが挙げられた。具体的に、出会い経験者は非経験者よりも長時間ネットに接続しており、特に「SNS」を利用していた。「SNS」上で既存の友人・知人とやりとりするだけでなく、新たな他者との関係を形成したり、自ら日記等の発信をしているため、1日のネット利用時間もそれに比例して増加したと考えられる。

また、有意差はなかったが本研究の結果から、中学生のネット利用の実態について一部を明らかにすることができた。具体的には、中学生が利用しているネット端末の変化が挙げられる。第一に、ネットを介した出会い経験の有無に関わらず、「iPod」等の音楽プレーヤーからネットを利用している者が複数いたということである。特に保護者は「iPod」を単なる音楽プレーヤーとしか認識しておらず、自宅でネット契約をしていない場合でもフリースポットからネット利用が可能であることを把握していない可能性が高い。それゆえ保護者に対して、携帯電話やパソコン、スマートフォン以外のネット端末からネット利用が可能である

ということを中学校における講習会等の機会を通じて周知させたい。第二に、スマートフォンからのネット利用が中学校Aの生徒に広まりつつあるということである。数年前まで青少年のネット利用は携帯電話やパソコンからが主流であったが、本研究の結果より、スマートフォンからのネット利用が今後より活発化することが予想された。利用するネット端末を携帯電話からスマートフォンに変えることで、ネット利用時間が増加するという研究もあるため（楽天リサーチ、2012）、中学生のネット利用について出会いだけでなく、ネット依存やそれに伴う学校生活の乱れといった他の社会問題が深刻化する恐れもある。

本研究は中学校Aという限られた範囲における生徒への質問紙調査であったため、この結果から中学生一般の傾向について言及することは難しい。しかしながら、本研究をベースとして更なる縦断的・横断的調査を行い、中学生のネットを介した出会いについて研究を深めたいと考える。

注

(1) 質問項目は以下の通りである。紙面の関係上、一部省略し、レイアウトは変更してある。

・あなたは現在どの道具(端末)からインターネットに接続していますか。あてはまるものを全て選んでください。

①自分専用の携帯電話(スマートフォンを除く)②家族の携帯電話(スマートフォンを除く)③自分専用のスマートフォン④家族のスマートフォン⑤自分専用のパソコン⑥家族のパソコン⑦iPod(iPodtouchなど含む)⑧その他のインターネット機器⑨インターネットは全く利用していない

・あなたが現在最も利用している道具(端末)にはフィルタリングが導入されていますか。いずれかを選んでください。

①導入されている②導入されていない③わからない

・あなたはインターネットを一日平均何時間くらい利用していますか（携帯電話・スマートフォン・パソコンなどの利用時間の合計）。いずれかを選んでください。※Eメールをしている時間も含まれます。

① 1時間未満② 1時間～2時間未満③ 2時間～3時間未満④ 3時間以上

・あなたは（携帯電話・スマートフォン・パソコンなどから）Eメールを一日平均何通くらい送受信していますか（ショートメールを除く）。いずれかを選んでください。

①10通未満②10～29通③30～49④50通以上

・あなたはネット上で知り合った人と実際に会ったことがありますか。いずれかを選んでください。

①ない②ある

- (2) 参考までに、精度が落ちている可能性はあるが、 χ^2 検定をした結果、有意差はなかった ($\chi^2=9.70$, ns)
- (3) 1日のネット利用時間・メール送受信数は共に「〇〇以上」という選択肢があるため、ウィルコクソンの順位和検定は最も理想的な検定方法ではない。しかしながら簡易的な方法であり、結果が明確に示せるため、本研究ではウィルコクソンの順位和検定を用いた。
- (4) 本研究では親友を「互いに強い信頼で結ばれている友人」として回答を求めた。

参考文献

- 古川良治 (2008) 「インターネットにおける自己開示研究の方向性に関する考察」『社会イノベーション研究』3(2), 1-18
- 群馬大学社会情報学研究センター
(2010) 「モバイル・インターネットの進展と親密圏の変容に関する総合的研究」
<<http://www.si.gunma-u.ac.jp/kenkyu/index.html>> Accessed 2013, March 8
- 伊藤賢一(2011) 「中高生のネット利用の実態と課題—群馬県青少年のモバイル・インターネット利用調査から—」『群馬大学社会情報学部論文集』, 18, 19-34
- 加藤千枝 (2013) 「青少年女子のインターネットを介した出会いの過程—青少年女子15名への半構造化面接結果に基づいて—」『社会情報学』, 1(4)
- 警察庁 (2012) 「コミュニティサイトに起因する児童被害の事犯に係る調査結果について (平成24年上半期)」
<<http://www.npa.go.jp/cyber/statics/h24/h24deai-bunseki.pdf>> Accessed 2013, March 8
- 警察庁 (2014) 「平成25年中の出会い系サイト及びコミュニティサイトに起因する事犯の現状と対策について」
<<http://www.npa.go.jp/cyber/statics/h25/pdf02-2.pdf>> Accessed 2014, March 8
- 木内泰・鈴木佳苗・大貫和則 (2008) 「ケータイを用いたコミュニケーションが対人関係の親密性に及ぼす影響：高校生に対する調査」『日本教育工学会論文誌』, 32(Suppl.), 169-172
- Kraut, R.E., Kiesler, S., K., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, J. & Crawford, A. (2002) 'Internet Paradox Revisited', *Journal of Social Issues*, 58, 49-74
<<http://kraut.hciresearch.org/sites/kraut.hciresearch.org/files/articles/kraut02-paradox-revisited-16-20-2.pdf>> Accessed 2014, March 8
- 内閣府(2014) 「青少年のインターネット利用環境実態調査」
<<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/>>

- chousa/h25/net-jittai/pdf-index.html > 楽天リサーチ(2012)「スマートフォンの使用実態
Accessed 2014, March 8 に関する調査」
Newman, B.M.・Newman, P.R. (1988) <[http://research.rakuten.co.jp/
'Development Through Life : Third Edition' report/20120524/](http://research.rakuten.co.jp/report/20120524/)> Accessed 2014, January
=(1988) 福富護訳：『生涯発達心理学-エリクソン 8
ンによる人間の一生とその可能性』川島書店